

Title	莆仙傀儡北斗戯と民俗，宗教の研究
Sub Title	The folklore and the religion of the puppet play "Bei-dou Xi" in Pu-Xian
Author	葉, 明生(Ye, Ming-Sheng) 道上, 知弘(Michiue, Tomohiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション No.30 (2003. 3) ,p.103- 118
JaLC DOI	
Abstract	中国南方において，傀儡戯は戯劇芸術として人々に鑑賞されるだけでなく，民間の宗教や民俗と密接なつながりを持ち，さらにはそれ自身も宗教(道教)に属して，民衆の社会生活において宗教としての役割を果たしていた。福建省の民間においては，今もなおこのような宗教や民俗と密接なつながりを持った傀儡戯が保存されており，なおかつ，この種の傀儡戯の多くは福建道教の閩山派道壇，および福建道教の女神陳靖姑信仰の活動と不可分な関係にある。福建寿寧県の梨園教の傀儡戯，南平，永安の大腔傀儡戯，龍岩上杭などの高腔傀儡戯，菁田，仙游などの莆仙傀儡戯などがそれであり，今にいたるまで鮮明な宗教的，民俗的色彩を備えている。本論文では莆田県の民間における傀儡戯である北斗戯の状況に重点をおいて紹介することにする。北斗戯は莆仙傀儡戯の重要な宗教演劇の一つであり，さまざまな宗教的意義と儀式形式を持った演劇が演じられる中であって，ただ北斗戯のみが道壇(仏筵)の「筵里」を設けずに演じられる。その演劇と儀式はすべて傀儡師によって完成され，儀式と演劇もまた舞台(傀儡棚)の中で完成されるため，北斗戯は宗教儀式的の方面において，他の宗教演劇に比べて独自性を有しており，そのことは我々が莆仙傀儡戯の宗教性，および莆仙民間宗教(特に道教閩山派)と演劇の関係を考察する上で，極めて典型的な意義を持っている。その中でも強烈な民俗的意味合いを持っている「戲棚過関」は，はるか古代の莆仙傀儡戯の姿を思い起こさせてくれる。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20030331-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

莆仙傀儡北斗戯と民俗、宗教の研究

葉 明 生

訳者 道上知弘

中国南方において、傀儡戯は戯劇芸術として人々に鑑賞されるだけでなく、民間の宗教や民俗と密接なつながりを持ち、さらにはそれ自身も宗教（道教）に属して、民衆の社会生活において宗教としての役割を果たしていた。福建省の民間においては、今もなおこのような宗教や民俗と密接なつながりを持った傀儡戯が保存されており、なおかつ、この種の傀儡戯の多くは福建道教の閩山派道壇、および福建道教の女神陳靖姑信仰の活動と不可分な関係にある。福建寿寧県の梨園教の傀儡戯、南平、永安の大腔傀儡戯、龍岩上杭などの高腔傀儡戯、莆田、仙遊などの莆仙傀儡戯などがそれであり、今にいたるまで鮮明な宗教的、民俗的色彩を備えている。本論文では莆田県の民間における傀儡戯である北斗戯の状況に重点をおいて紹介することにする。

北斗戯は莆仙傀儡戯の重要な宗教演劇の一つであり、さまざまな宗教的意義と儀式形式を持った演劇が演じられる中であって、ただ北斗戯のみが道壇（仏筵）の「筵里」を設けずに演じられる。その演劇と儀式はすべて傀儡師によって完成され、儀式と演劇もまた舞台（傀儡棚）の中で完成されるため、北斗戯は宗教儀式的方面において、他の宗教演劇に比べて独自性を有しており、そのことは我々が莆仙傀儡戯の宗教性、および莆仙民間宗教（特に道教閩山派）と演劇の関係を考察する上で、極めて典型的な意義を持っている。その中でも強烈な民俗的意味合いを持っている「戯棚過関」は、はるか古代の莆仙傀儡戯の姿を思い起こさせてくれる。

1. 北斗戯のストーリー、および演出背景の概況

北斗戯のテーマは道教閩山派の女神陳靖姑（劇中では陳真人）の祈嗣、保産、扶幼など女性の妊娠と幼児保護などの方面でのあらたかな靈験を扱ったものが目立ち、莆仙の民間で最も流行した生育を題材とした宗教儀式劇である。各地での演出形式は基本的に一致し

ているが、その戯曲の内容には雅俗の区別がある。全演目は半日（約二時間）かけて演じられ、約十六場、その演目内容は、『真宗登殿』、『河母出台』、『表文奏旨』、『聖母接詔』、『河母欄路』、『陳真姑伝出征』、『河母殺敗』、『知県接使』、『到廟祈祷』、『回朝見帝』、『送太子』、『設計謀害』、『童子下山』、『道人救主』、『太子登基』、『北斗過関』¹⁾などである。その物語はおおかた次のようである。

北宋の真宗（一説には太宗）には後継ぎがなく、帝業を継続させることができずにいたので、帝は詔を發して使いを送り、龍虎山の張天師に黄籙醮文をつくらせ、早く太子が生まれることを祈った。天の銀河（天河）には、人間の世界の生育を一手に担う女神天河聖母がいるが、その性質は残忍で、配下に天狼、天狗、弧鸞、寡宿、流霞、産厄、五方童子などの悪鬼を従えて天河を守っていた。龍虎山の張天師十二代目の張志顛天師は詔を奉じると、黄籙大醮を設けさせて太子が生まれるよう祈り、あわせて青詞（道教の祭文）を捧げて玉皇大帝に主宰してもらおうよう請うた。天上の玉皇は張天師の祭文を受け取り、宋の帝に後継ぎがないことを知ると、注生星君に命じて宋帝趙匡義はこれから三百六十年帝業を伝えることができることを調べさせ、南斗宮の衛房聖母に使いをやって花果を採らせて麟児に送った。衛房聖母が降生大神をよんで臨水宮の陳真人（陳靖姑）のところにつかわし宋帝の祈子のことを説明させると、陳真人はその義妹林九娘とその子、黄聡、降生大神に命じて北斗宮に送り、高夫人と相談させて花果を抱いて下界に降らせようとした。天河聖母は陳真人の文書を見せず、林九娘一行を通すまいと邪魔をしたが、林九娘と黄聡の前に敗れ去る。高夫人は北斗宮を管理しており、林九娘らは「龍胎」を送りとどけ、高夫人に天河を渡るのを援護するように頼んだ。高夫人は「群體（牛の肝）や緑豆飯」などで天狼と天狗を引き寄せ、その隙に関を突破して下界に赴かせた。陳真姑は天河聖母の悪行を聞き、兵を挙げて討伐に赴くと、天狼、天狗はあらがうことなく降伏した。天河聖母は戦に敗れたが、その恨みをおさめがたく、流霞、産厄の二煞星を皇宮に潜入させて皇后符氏母子の命を殺めようとした。降生大神はその報せを聞き、二煞星を降す。皇后符氏は妊娠し、帝は使者を古田県の臨水宮にやり、陳真人に「龍胎」の保護を祈る。陳真姑は帝の敬虔さに感じ入り、女道士に化けて使者の道中に追いつき神草を贈った。使者は都に帰ると皇帝に謁見し、帝が神草を煎じて皇后に飲ませると、果たして太子が生まれたのであった。恨みがおさまらない天河聖母は、弧鸞、寡宿の二煞星を下界に遣わし探らせたところ、皇后がすでに太子を生んだことを知り、五方童子（これも煞星）に下界に下り太子を害すよう命じた。陳真人はすでに大軍を派遣して皇宮を警護しており、五方童子はあえなくとり

こにされ、衛房聖母のもとに護送された。衛房聖母は天河聖母がさらに弧鸞と寡宿をやって太子を害そうとしているのを知り、道士に化けて宮廷に入り法術をもって守りを固めたので、太子には何事もなかった。弧鸞と寡宿は衛房聖母が来たことを知ると、慌てふためいて逃げ出し、変身して樹の上に隠れていた。しかし、通りがかった張仙士が、樹の上に妖怪がいるのを発見し、二匹の妖怪を金弾で射て、とりこにし、衛房聖母のもとに送って処分した。衛房聖母は金、銀二人の近侍（舍人）に将兵を与えて天河聖母を征伐に赴かせると、天河聖母はあらがうことなく投降した。太子は成長し大宝の御世になった。すなわち仁宗皇帝（1023-63）である。仁宗は陳真姑の加護に感謝し、古田に使者を遣わして宮廟を増築し、陳真人の功德を称えた。陳真姑は百花橋を設け、疱瘡にかかった人々や、厄年の人々にひとしく平安が得られるようにした。最後に舞台の上で「過関」の科儀が行われる。

北斗戯の上演は、莆仙地区の生命に関する儀礼の中で最も盛んに行われている民俗的な現象である。北宋の真宗皇帝の「求嗣」の伝説を借り、民間における陳靖姑の生育女神信仰と、生殺の大権を握る北斗七星元君高夫人信仰が持つ意義を敷衍し、莆仙傀儡戯の舞台に乗せ、独特の宗教儀式劇をつくり上げたのである。

北斗戯は家庭で子供が順調に成長期の難関を越えられるように祈願するために、または子供が生まれて間もない頃に神に加護を頼むために、または子供の時に神に祈願した者が成人した後、もしくは結婚する時に神に感謝するなど、様々な状況のもとで行われる神に対する感謝のための儀式活動である。北斗戯の上演は家庭単位で行われ、一家の人が上演を依頼する。上演の場所は宮廟の舞台であったり、個人の家の中庭であったりするが、最もよく見られるのは家の中に呼んで上演してもらう形である。

この劇の準備は比較的簡単で、家で上演する際も舞台を組む必要はなく、広間の前、もしくは家の前の平坦な場所に何本かの竹竿を組んで、舞台用の幕を掛け、蕙を敷けばそれで上演可能である。舞台の前には机を並べ、正卓（舞台正面）を「北斗卓」と呼び、陳靖姑と北斗高夫人に供える香などを置く机とする。上に「臨水夫人、高夫人之香火位」と書き、机の上に様々な果物や肉類などの供え物を並べる。舞台右よりの机が「田公卓」で、供え物は「北斗卓」に比べるとやや少なく、上演が終わると、芸人たちがその供え物を持って帰る。長卓には演劇の神である田公元帥の神牌や田公元帥の傀儡などが祀られている。舞台の左右にはそれぞれ「北斗燈」が掛けられ、ひとつは劇の後に燃やされて神に捧げられ、もうひとつは田公元帥に送るために芸人によって持ち帰られる。「北斗卓」の上には

紙で作られた「百花橋」が置かれ、この橋は儀式が終わった後に「北斗燈」とともに燃やされる。他には白米を盛ったものひとつ、銅錢三十六個、赤い布三尺六分、手拭い一枚を準備し、劇中の「造塔」、「過橋」などの科儀で用いる。この他、オス鶏一羽と「過関」をする人の衣服の準備が必要で、これらは劇中の「過関」で用いられる。

2. 北斗戲科儀の上演と民間習俗

北斗戲における十六場の演目の中で、第十五場までは蕭仙傀儡戲の『北斗戲』のストーリーが演じられ、最後の一場は「北斗過関」、つまり傀儡戲で宗教（道教）としての過関科儀を演じる儀式劇である。劇の前半部分の大半は登場人物のストーリーを演繹した道教閩山派の神々の妖怪退治や、宋の皇室のために行った祈子、懷孕、護胎、救産、保嬰などの一連の出産に対する方術性の高い加護、そして、宋の皇帝に子を得させ、仁宗が天下を統べるといった様々な民俗的な生育に関することがらを物語っている。その最後の「北斗過関」では直接芝居の形式を借りて道教の法事を行い、「過関」の科儀の形式と行程は、その民俗的特性をもっとも顕著に示している。

「北斗過関」は、「請神」、「分宮」、「造塔」、「過関」、「過橋」、「分花」などの科儀で段落構成されており、道壇儀式の演劇化した表現形式になっている。その後の科儀段落においては、信者の母子（すなわち感謝のために北斗戲を依頼した雇い主の母子）が舞台に現れて参加し、神と人がともになる。その各段の科儀の内容、形式の概要は次の通りである。

1. 請神

「請神」は「鐘鼓且神」ともいい、前後二段に分け、前段では登場人物の「且」（陳真姑）が舞台上がり、「四海万民為第一、閩（廬）山正法（治）鎮乾坤。抱送男女度関煞、一炉香火万家伝（中）。」（天下の万民を第一とし、閩（廬）山の正法は天地を治める。子供たちを抱いて関煞を通れば、一つの香火が万家に伝わる。）²⁾と宣言する。そして、陳真姑は道壇の法師として「請神」の科儀を行う。これがいわゆる「請神」であるが、実際には道教閩山夫人教の「夫人咒」を唱える。その咒文とは、

本師藏吾心，本師藏吾形（五形），吾是勅封崇（宗）福陳夫人。今日橋頭來召請，請各府各州各県諸婆神。父是威靈陳長者，母是玉宮葛（易）夫人。師兄便是陳一使，兄是靈通三舍人。回（懷）岩打洞林林娘，降生聖母馬夫人，救幡治病天妃姐（者），

海口姓〔李〕（高）夫人。左殿相公王也使，右殿即度姚舍人。銅馬三郎護衛將，鉄馬四將押營兵。殿前太慰盧太保，莊郭周劉四將軍，白馬五郎（張）相維持，花前王母切現空。回岩破洞張聖君，得病救護蕭聖者，三十六宮諸婆神，七十二院玉女生，出入游行艱（間）難道，驅邪殺（煞）鬼救万民。諸神諸聖齊降赴，降赴道場作証明。吾奉太上老君如律令勅。³⁾ (P.108)

2. 分宮

この段は事実上、陳夫人の眷属である三十六宮夫人のためのものであり、各宮の夫人には宮名、所在地、神としての役職、そして神の名前が語られる。「第一君恩宮福州府古田県送喜婆神陳大娘，第二宮紫微宮汀州府天台県抱婆神高二娘，第三清水宮福州府永福県誠心婆神鄭四娘…」のごとくである。その三十六宮婆神は民間での懐胎から保胎，出産から教育までの一切の養，育，教の一貫した役割を分業し，その出身地も以前の閩越の地から周辺の土地まで遍く広がり，福建の各府県の他にも，「杭州府太平県」，「万隣府万安県」，「安慶府潜山県」，「武昌府南台県」にまで及び，陳靖姑信仰が民間においていかに流行したかを理解することができる。忠門鎮坂尾村傀儡戲「万春興」班による北斗戲の婆神は福建省籍の他には「揚州府清流県安胎婆神鄭一娘」，「揚州府宣興県送花婆神故七娘」，「太平府金昌県送喜婆神盧六娘」，「温州府南城県教嘔婆神劉四娘」，「広信府玉山県教叫婆神郭二娘」，「杭州府懷安県報喜婆神方一娘」などである。傀儡戲はその師伝の相違や，異なる時期の道教の影響を受けたことなどの理由で，元来は道壇の科儀内容に属すものも，ことごとく傀儡戲のなかに組み入れられたことがわかる。

3. 造塔

民俗的な信仰には，宝塔によって人の魂を守り，人の生命を守ることができると考えられているものがあり，そのため道壇の「造塔」科儀の内容は保護すなわち「過関」をしようとする子供の魂の安全にある。すなわち，「（佐）起宝七層高，塔上孩児笑呵呵。也有銅錢佐宝塔，也有白米白糕（高），諸仏火光佐宝塔，孩児過橋保長生。」（同前）。つまりこれは道壇の「造塔」を脚本どおりに舞台上上げ，北斗戲を依頼した家の子供の長寿祈願をしてあげているのである。

「造塔」の前に，北斗戲を依頼した家の信者の母子は必ず舞台上上がり問答をしなければならず，劇中で陳真姑は彼女らに会うことを請い，信者の母子は陳夫人に対して挨拶をする。陳真姑が壇で用いる全てのもの，例えば白米，銅錢三十六個，赤い布，手拭いなど

が揃っているかと問い、過関する子供の母親が、その一つ一つに「あります」と答えた後に「造塔」科が始まる。過関する子供の母親は手に過関に用いる衣服を持ち、もう片方の手に小さな雄鶏を掲げ、ずっと舞台のわきで待ち、傀儡師の指図にいつでも従えるようにする。

4. 過関

「過関」の概念にある「関」というのは、道壇におけ「北斗関煞」のことである。民間におけるいわゆる人生の初めに通らなければならない関煞は三十六にも達し、傀儡師は通常それを芝居の上演に合わせて八道に縮める。それぞれの道には名前があり、それぞれ一人の法神によって守られている。北斗戯における「北斗関煞」とその保護神の名は次に挙げる如くである。北斗関…林九皇君⁴⁾、火羅関…清水祖師、金鶏関…横山仙師、天吊関…玄天上帝、百日関…張公聖君、弓箭関…李広將軍、諸藩関…田公元帥、揚州関…林氏九娘。

「過関」の前に、傀儡師はまず過関する子供の帽子と衣服を人形に着せる。舞台の前には線香台を置き、過関の保護神への供え物を並べる。(図版1) 傀儡師が「過関詞」を唱えると、数人の傀儡師が両手に人形を持ち、右から左に舞台を一周から三周する。四ヶ月の過関人は、その衣服を人形にまとわせ、または子供を抱いて舞台の上を一周する。歩けるもの、十六歳、あるいは二十歳以上の者は、みな傀儡師の後について舞台を回り、過関人の母親は雄鶏を掲げて舞台を一回りする。ひとつの関を通るたびに「過吓! (通ったぞ!)」とみんなが大声で叫び、その関煞を通ったことを表す。(図版2) 第一関の「過関詞」は以下の如くである。

(巨唱) 兒子命帶北斗関，北斗煞，北斗関 煞難得過，陳氏皇君婆神來過除。(みな叫ぶ)
過吓!⁵⁾

5. 過橋

「過橋」は道壇においても多くの名称があるが、傀儡戯では七つの橋のみで、金橋、銀橋、鉄橋、木橋、百花橋などの名称があり、総称として「百花橋」と呼んでいる。「過橋」の時は、舞台に赤い布を敷いた小さな机を用意し、その上に紙で作った「百花橋」を置く。舞台の上の傀儡師と過関する子供は橋を跨いで渡り、舞台を数周する。その「過橋詞」は次のようである。

(旦唱) 第一橋頭水晶晶，看見孩兒痘臨身，娘姐抱兒橋上過，易長易大保成人。…第七橋頭駐馬亭，花兒見母許百般。吉人在橋唱歌樂，太平女子出行人。陽橋本是石頭造，陰橋只用紅布粧，接引童子橋上過，歡歡喜喜保安康。抱兒轉，抱兒回，寧可回頭拜父母，不可回頭拜他人。⁶⁾

6. 分花

「分花」は「過関」とは科法の内容において著しく異なっており、生育の加護を祈願する科儀である。民間にはもともと男子を求める時は白い花，女子を求める時は赤い花という習俗があるが，北斗戲および道壇において「分花」は同一の儀式の中で行われる。「過関」とは対象が異なり，祈願する内容も異なるが，科儀の内容は男兒女兒を守り，「過関伝花」するという統一的なものである。そのため，北斗戲の中でもそのまま伝えられて来ており，かつ「過関」の祝い事のひとつとなっている。

「分花」の前に，「過関」を依頼した家の「信者の女性」が舞台の上で「共真人求一枝花（真人に花を一輪求めます）。」と言い，劇中の陳真姑は「瓦（我）念十二月花名随你選一枝（十二月の花を言うので，好きに選びなさい）。」と応える。この十二月花名というのは「正月春桃花」，「二月楊桃花」，「三月長春花」，「四月紫微花」，「五月石榴花」，「六月碧蓮花」，「七月茉莉花」，「八月丹桂花」，「九月芙蓉花」，「十月菊花」，「十一月瑞香花」，「十二月腊梅花」である。莆田，仙游両地における「民間の傀儡北斗戲で言われる花の名も限りなく異なるが，真人に花を求める時の求める花はみな同じで，まず先に石榴花を求め，次に長春花（または碧蓮花）を求め，最後に陳真人が丹桂花をおくる。（図版3）全ての花には「男女」の別があり，その祝い事の内容も異なる。例えば，三輪の花を求める意味は，次のように説明される。

(旦白) 石榴花開滿樹紅，枝頭結子喜成双。万緑叢中紅一点，榮華富貴滿亭（庭）紅。…碧蓮能結子，氣味亦清香，結尽無蓬樹，因風度玉郎。瓦（我）再送一枝丹桂花乞汝，汝成三桂連芳入兆。此子抱転厝，関煞尽消除。建壇已畢，神等退班。⁷⁾

「分花」の役割はまた「過関」の対象とも関わりがあり，例えば，長春花を求める時は，病気がちな子供を過関させるが，これは「長春花開，長春不老」の意味であり，新婚の人が取る「石榴花」は「石榴結子喜成双」，もし「紫微花」を取れば，それは「伝子伝孫耀祖宗」の意味などである。このため，「分花」は「過関」人の実際の祈願内容によって

選ばれるのである。

この他には、ある傀儡戯では「分花」が終わった後に「斬橋」の科儀があるが、実際には「斬橋」とは舞台の「百花橋」を撤去し、北斗燈および供え物の銀、上奏文、神牌と一緒に舞台の前で火にくべることをいう。舞台の傀儡戯では「仁宗皇帝」や諸々の登場人物が団円を祝う。「合家齊来拜謝天，添丁進財（または「福寿」）永万年。伝子伝孫科甲聯芳，真人顯化声名揚」という賛語に続き、舞台で過関人のために「加宮」が演じられ、北斗戯の全てが終了する。(P.109)

以上述べたような北斗戯の「北斗過関」において、われわれは「戯即是儀」，「儀即是戯」，「儀戯兼触」，すなわち宗教の世俗化と戯劇の儀式化という一種の文化現象を見ることができ、その中から戯劇と民俗は不可分の関係であり、世俗の感情も断ちがたいものであるということを知ることができるだろう。これらはこれまでに多くの学者が宗教学，民俗学，および社会学の視点から総合的な考察を行ってこなかったために、見出しにくかった文化現象，芸術性なのである。

3. 北斗戯の関連資料と道教の関係

北斗戯には、皇帝皇后、官吏などの人物の他に、多くの神仙、星煞の名前や、道壇の活動に関係した科法の名称が見られる。これらの人物や科法の名称は、通常、道教閩山派の道壇でよく見られるものであり、一般の人々には分かりにくい。莆仙戯の芸師は北斗戯を創作、上演する時に基本的にそれらの人名や用語を基礎としつつ、常にその内容を少し変え、観衆向けに直している。北斗戯の理解と議論の便をはかるために、ここでこの芝居の中での人物名称と関連術語について簡略な説明を行い、民間道教の莆仙傀儡戯に対する影響を考察したい。

1. 陳靖姑とその附屬神

陳靖姑は、北斗戯では陳真姑、陳真人などと呼ばれ、古田県臨水宮百花橋に位置する女神である。劇中での彼女の主な役割は北斗宮高夫人、南斗宮衛房聖母と組んで、天河聖母とその手下の悪煞たちと戦いを繰り広げ、天上の花神を皇帝の家に植え、皇后を妊娠させてその胎児を保護し、最後に太子を誕生させて平安に育てる、というものである。陳靖姑は劇中の人間世界における保胎扶嬰の最も重要な女神である。

劇中にはさらに二人の人物、林九娘と黄聡がいる。林九娘は伝説中の陳靖姑の義妹で、

三夫人の一人である。閩山教の法神であり、陳夫人の妖怪退治の助手でもある。劇中での役割は百花橋の「花果」を北斗宮に送り届け、北斗高夫人に「注寿」を請うもので、途中、黄聡舎人を助ける戦いで、天河聖母を打ち負かし、「花果」を北斗宮に届け、陰陽の胎気をこしらえる。そしてのち、胎気を帯びた「花果」を持ち帰り、天河を渡る時に、天狼、天狗と戦うが、巧みに天狼、天狗を欺き無事に皇宮に送り届け、皇后を懐胎させることに成功する。黄聡舎人は陳靖姑とその夫黄演の息子である。妊娠している時に長坑鬼に害され、生命の危険にさらされたが、観音（あるいは如来）によって救われる。また、その母から閩山法を学んだために、閩山教の神の一人となった。今日、民間道壇の神像の前にある二童神は、左が黄聡舎人（または王聡）、右が白舎人（麻疹神、黄聡の義弟）である。劇中ではさらに陳靖姑の下に「五營兵馬」があるという。その「五營」とは、

東方九夷營，其神張聖者，統兵九万九千九百九十名，南方八蛮營，其神蕭聖者，統兵八万八千八百八十名，西方六戎營，其神劉聖者，統兵六万六千六十名，北方五狄營，其神連聖者，統兵五万五千五十名，中央三秦營，其神李元帥（哪吒王子），統兵三万三千三十名。⁸⁾

いわゆる「五營兵馬」とは閩山教の神々の系統で、この他にも北斗戯の中では「三十六宮婆神」が出てくるが、これも陳靖姑女神の系統の神々であり、伝説では白蛇の精が皇宮に潜入して三十六人の女官を食べ、その後、陳靖姑が法術でその屍骸を人に変えた。皇帝は彼女たちが蛇に食べられたために妖気があるのではないかと恐れ、彼女たちをそばに留め置こうとせずに、陳靖姑に下賜した。陳靖姑は彼女たちを臨水宮に連れて帰って法術を教え、その後、彼女たちは人間世界における生育の「胎」、「孕」、「産」、「育」、「教」、「護」などの役割を分業で担う保育神となったのである。

2. 神仙系列の人物

北斗戯における神仙は、玉皇大帝の他に、主要なものとして北斗宮高夫人、南斗宮衛房聖母、降生大神、赤脚仙、張仙などの人物がいる。

まず北斗宮の状況について説明しよう。中国道教における一連の神仙の中で、高夫人は星君の系統に属する神ではあるが、道教のどの諸典籍をひもといても、いわゆる「北斗宮高夫人」というのは典拠がなく、民間の文人や芸能者たちが道壇の資料や伝説をもとにしてつくりあげた神仙であることがわかる。道教の関連典籍を調べると、北斗九辰星君に属

する星君は、北斗陽明貪狼星君、北斗陰精巨門星君、北斗真人祿存星君、北斗玄冥曲星君、北斗真人丹元廉貞星君、北斗北極武曲星君、北斗天闕破軍星君、北斗閭明左輔星君、北斗隱元右弼星君などである。⁹⁾そして「北斗」の星の名前と北斗戲の關係は、これらの典籍からその影響を見出すことができる。すなわち『晋書・天文志』で北石氏が「第一曰正星，主陽特，天子之象也。二曰法星，主陰刑，女主之位也…」。¹⁰⁾と言っているが、おおかた「北斗宮高夫人」はここからこじつけて持ってきたものであろう。そして、福建道教閩山派では、北斗に女神の名前はないものの、その役割は「注人長生」であり、嬰兒を護るといふ靈驗があるために、北斗戲における高夫人はここから来たものであることがわかる。

南斗衛房聖母の情況も次のごとくである。その神称「南斗星君」は女神ではない。道教書の『真一口訣』には「南斗者，即斗之第五星，主上其生録也。」¹¹⁾とあり、民間での俗称「南斗主生」であるが、それを傀儡戲のグループが出産を加護する役を担う「衛房聖母」にまで意味を広げたのである。劇中での彼女の役割は林九娘とともに「花果」を「北斗宮」に届けて寿注して、それを下界に送ることであった。さらに五方童子を降し、道士に姿を変えて宮廷に入って太子を守り、最後には金銀の二舎人を遣わして天河聖母を捉え、同時に諸悪鬼をも降して、それらを悪から善に改心させる。その劇中での重要さは「北斗高夫人」をしのいでいる。

劇中での『聖母接詔』の一幕では、「降生大神」という人物も登場する。劇中で語られることによると、彼の仕事は「管掌孩溪賜麟兒」であるという。この神の劇中での唯一の役割は「臨水宮の真人のところに行き、百花橋で花果を取り、さらに北斗宮高夫人のところへ赴いてその寿命をはかり、趙家（宋朝）に送って出産させる」¹²⁾ということである。この他にも、この劇においては、玉帝の使者に玉帝の勅命を受けた降生大神は「七（赤）脚大仙」を下界に下ろして皇后符氏に「胎兒降生」させている。劇には「赤脚大仙」が降生大神に従って下界に赴く場面があるが、その台詞も動作もない。この「赤脚大仙」に至ってはいかなる神であるのか、劇中ではまったく触れられていない。しかし、莆仙戲『弄八仙』の儀式的伝説によると、その赤脚大仙とは一説には劉海蟾、一説には韓湘子ということであるが、おそらく前者が正しいと思われる。劉海蟾とは五代から北宋にかけて流行した道教の全真派の開祖と伝えられている劉海のことであり、民間では「劉海戲金蟾」といふ伝説があるので、「赤脚仙劉海蟾」と呼ばれている。¹³⁾

北斗戲の中には相前後して二回、「張」という姓の仙人が登場するが、これはまったく異なる人物である。『河母出台』の一幕の後半で現れる龍虎山「正一天子師」張志顯とは、道教の天師（道術を会得した者に対する尊称）のことであり、彼の劇中での役割は宋の真

宗に「黄録醮文」を修めさせ、玉帝に奏上し、玉帝に太子を賜るよう願うことである。北斗戯の戯曲台本後半部分の『道人救主』の一幕には、また「張仙」（劇中では「生」と呼ばれる）という人物が登場するが、これは前述の張天師ではなく、民間伝説でのもう一人の神仙であり、天狼と天狗を弾弓で射る送子神邛である。『続文献通考』の記載によると、この張仙とは名を張元霄といい、その身の上と神としての靈験を次のように記している。

張元霄、眉山人。宋時游青白山，有四目老人，伝以弓弾，謂能避疫，併授以度世之法。元霄奉而修之，施常往来邛州挾仙樓，以挾弾為人家擊散災難，甚著神効，人因稱為張仙，或呼張四郎，敬之如神，後民間多繪其像，懸以祀之，謂能避邪，又可令人有子云。¹⁴⁾（張元霄，眉山の出身。宋の時代，青白山に行き，目の四つある老人に出会い，弓弾をもって疫を避ける術と，同時に世人を救う法を伝授された。元霄はこれを修得し，邛州の挾仙樓を常に訪れ，弓弾の術で人々の災難を撃退した。その神通力があらたかだったので，人々は彼を張仙，または張四郎とよび，神のように敬った。後に民間で多く絵画に描かれ，祀られた。厄を除いたり，子供を授けてくれる靈験などがあるという。）

莆仙戯には「張仙送子」（または「土地送子」とも）という劇があり，その内容は張仙が妖怪を弾弓で射る場面を演じ，子供を求める人のために祈る儀式劇である。

3. 凶星，悪煞

北斗戯では「天河母」を悪の筆頭としており，劇中では天河を管理する女神であるが，民間傀儡戯『北斗戯』の抄本においては，彼女は「世間の童男童女が天河を渡る時にその命を奪う」「三頭六臂」の悪煞神である。¹⁵⁾ 莆仙戯での「天河母」の典故は不明で，今もなお史料には未見である。道教の星宿には，たしかに「天河」という星があるが，『晋書・天文志』によると，「天高西一星曰天河，主察山林妖變。（空の高いところの西側に天河と呼ばれる星がある。山林の妖怪変化と思われる。）」¹⁶⁾ とあるが，これは北斗戯の「天河母」とは明らかに関係がない。北斗戯の「天河母」は民間伝説における幼い人間の子供の命を奪う悪星だと考えるのが妥当であろうが，その来歴についてはさらなる考察が待たれる。

天河母の麾下には，天狼，天狗，流霞，産厄，弧鸞，寡宿，五方童子などの一群の邪悪な勢力がいるが，その出所については明らかなものもあれば，考証が難しいものもある。その中の弧鸞，寡宿はその典故が明らかな神である。道教辞典によると次のように説明さ

れている。

弧辰寡宿 神煞名。術者謂人命犯此，則孤寡伶仃，生活悲苦。婦女憂忌。¹⁷⁾

天狼，天狗については、『晋書・天文志』所引の『河図』に記された妖星のうち、「天狗」のみその名が見られる。¹⁸⁾ 劇中の「五路童子」もまた天河を守る悪のひとつで、「凡有兒童幼女多生病症，皆吾掌管」（『北斗戲・童子下山』）と言われ、彼は天河母に命じられて生まれたばかりの太子の命を狙うが、陳真姑の閩山五營將軍によってとりこになってしまう。この「五路童子」の原型は道教の科儀本の中に見つけ出すことができ、彼と「五方靈童」は関係があるように思われる。『靈寶濟度全書』によると、「東方青靈童子」，「南方朱靈童子」，「西方皓靈童子」，「北方玄靈童子」，「中央黃靈童子」の名があり、この五方五靈童子は「天に昇り地に潜り，幽冥界を自由に行き来し，あらゆる靈魂を導いて，幽冥界から連れ出し，天界に往生させる。」¹⁹⁾ というが、五方靈童は「幽冥界を自由に行き来」し、鬼神と交わることができるので、民間では凶神とされて、悪煞の列の中に入れられてしまった。その他の「流霞」，「産厄」などの諸悪も、道教閩山派でもっぱら女性の出産に害をなす悪煞とされているため、『北斗戲』では太子の命を狙う悪党の仲間に入れられ、最後には陳真姑に退治されてしまうことになる。

4. 北斗過関の関と橋

北斗戲の「過関」の儀式は、基本的には道教閩山派の「過関」の法事に基づいており、戯劇化された演出で演じられる。傀儡戲の表現形式では制限があるので、その全ては道壇の儀式に照らして行うことはできず、その内容と形式を部分的に劇中で再現している。そのため、必然的に短縮、改変されており、過関する人や観衆が受け入れやすく、また理解しやすいようにしてある。傀儡戲『北斗戲』の上演に際しては、前述の「請神」，「分宮」，「造塔」，「過関」，「過橋」，「分花」などの段があり、これらはみな戯劇化された「過関」法事だとみなすことができるが、明らかにその改変の跡がいくつか見られる。

例を挙げると、劇中の北斗関、火羅関、金鷄関、天吊関、百日関、弓箭関、諸藩関、揚州関などの八関は、その大部分が道壇の「三十六関煞」を改変、短縮した名称である。道教閩山派の科儀本には、その三十六関煞が挙げられている。

鉄蛇関、四季関、無情関、鎖匙関、四時関、四柱関、鬼門関、閻羅関、湯火関、短命

関、百日関、千日関、深水断橋関、弓箭関、天吊関、夜啼関、虎傷関、不過関、落水関、五鬼関、金鶏落井関、浴盆関、撞命関、下情関、鶏飛関、金鎖関、取命関、直難関、打腦関、和尚関、断腸関、埋兒関、天狗関、白虎関、急脚関、開鎖関。²⁰⁾

道壇の「過関」は専門的な科儀であるが、傀儡戯においてはそれに従って一つ一つの関を通るということはできないので、それを縮めて八関とし、傀儡戯の舞台上で短い時間で「過関」が終わるようにしてある。いわゆる「三十六関」とは、だいたいにおいて幼少期に出遭う養育の面で起こりうる災難や、子供を死に導く原因を表している。嬰兒の健康、成長の安全のために、これらの災難を一つ一つ避けさせることが、道壇の「過関」の最も基本的な要素である。傀儡戯の『北斗過関』はすなわちそうした意味から発展してきたものである。

次に北斗戯における「橋」について説明する。道教閩山派の道壇では、多くの「過橋」の法事があるが、最も突出している「過橋」とは、やはり子供のための「過関」の法事において渡らねばならない多くの橋のことである。北斗戯において、一般的にはただ「百花橋」に全ての橋を代表させ、「過橋」によって子供が順調かつ平安にあらゆる危機の時を乗り越え、ゆえに平安無事であることを意味させている。しかし、道教閩山派でいう橋は二十四もあり、子供の命に関わる一つ一つの難関を象徴させているようである。その二十四の橋とは以下の通りである。

金橋、銀橋、鉄橋、花公橋、花母橋、南蛇橋、天狗橋、白鶴橋、金鶏橋、火魔橋、五鬼橋、麒麟獅子橋、黄斑飢虎橋、蜈蚣橋、蕉林橋、百花橋、北斗七星橋、七層宝塔橋、十字橋、仁宗皇帝橋、官員橋、前生奶姆橋、黄河橋、河水橋等。

傀儡『北斗戯』における「百花橋」などの「橋」とは、みな道教閩山派から吸収したものであり、民間の傀儡戯と道教閩山派が同じ流れをくんでいることをここからうかがい知ることができる。

以上述べてきたように、北斗戯は莆田傀儡戯における宗教劇の演目のひとつとはいえ、それが反映しているのは民間における道教閩山派の科法形態と民俗的な「願ほどき」の文化現象であり、演劇によって宗教（道教）の科儀を演じる典型的な事例のひとつである。そしてそれは民俗的な活動において演劇の審美的な働きをするということだけでなく、さらに重要なのはそれが宗教的で民俗的な働きをも持つことである。そのため、北斗戯の意

義は演劇研究の範疇を超えていて、それは宗教の世俗化、あるいは戯劇の儀式化というひとつの文化転換現象でもあり、われわれに儀式と演劇、演劇と民俗、宗教の戯劇化などを考えるうえで、得難い実例を提供してくれているのである。

2001年8月3日

福建省芸術研究所にて

注

- 1) 本論文に引用したのは莆田県編劇小組の整理による『北斗戯』(1963年7月)であり、この資料は福建省芸術研究所資料室に現存する。原抄本の第一幕は欠落しており、現在は仙游県の抄本『北斗』によってこれを補っている。北斗戯に関するストーリーや部分的な文章は莆田の民間に伝わる傀儡戯抄本『北斗戯』を参考にしたことを、ここに特記しておく。
- 2) 注1と同じく、『北斗戯』抄本22ページより引用。
- 3) 注1と同じく、『北斗戯』抄本23ページより引用。
- 4) この抄本での第一関「北斗関」の保護神は「北斗星君」であり、「林九皇君」ではない。第八関「揚州関」の「林九娘」と前の「林九皇君」は実質上、同一人物であり、第一関の「林九皇君」は誤写であることがわかる。
- 5) 注1と同じく、『北斗戯』抄本25ページより引用。
- 6) 注1と同じく、『北斗戯』抄本26ページより引用。
- 7) 注1と同じく、『北斗戯』抄本27ページより引用。
- 8) 李叔還『道教大辞典』の「五营」の項目。浙江戸籍出版社(台湾远流图书公司版影印による)1990年12月、63ページ。
- 9) 胡孚琛『中華道教大辞典』第十二関「道教神仙及民俗信仰」、北京、中国社会科学出版社、1995年8月、1478ページ。
- 10) 注9と同じく、『中華道教大辞典』799ページより引用。
- 11) 注9と同じく、『中華道教大辞典』1477ページより引用。
- 12) 注1と同じく、『北斗戯』抄本6ページより引用。
- 13) 注9と同じく、『中華道教大辞典』第十三類「劉海戯金蟾」より引用。1621ページ。
- 14) 注8と同じく、『道教大辞典』288ページより引用。
- 15) 莆田民間傀儡戯班(著者不詳)抄本『北斗戯』4ページより引用。
- 16) 注8と同じく、『道教大辞典』223ページより引用。
- 17) 注9と同じく、『中華道教大辞典』75ページより引用。
- 18) 注8と同じく、『道教大辞典』63ページより引用。
- 19) 竜岩市広濟壇陳春來抄本『関書一宗』、葉明生編著『福建省竜岩市東肖鎮閩山教広濟壇科儀本彙編』、台北、新文書出版公司、1996年11月版、第二部分「経科本附件」、309ページ。
- 20) 注19と同じく、陳春來本抄本「造橋一段」、238-241ページより引用。



図版1 過関の儀の冒頭。陳靖姑が登場する。舞台前面には陳靖姑と高夫人に捧げる供物と線香が置かれている。(仙游地区東汾)



図版2 過関する人たちが女神に導かれて舞台を巡る。右端には模造の百花橋がみえる。過関ののちに「過橋」をし、鯨を落とす。(仙游地区東汾)



図版3 分花ののち、祈願者を代表する人形の頭に花がかざされる。これは生命の花である。
(仙遊地区東汾)